様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１６７５３

研究課題名（和文）視聴覚メディアによるパフォーマンスの表象研究

研究課題名（英文）A study of the representation of performance by audio-visual media

研究代表者
仁井田　千絵（Niita, Chie）

早稲田大学・総合研究機構・その他（招聘研究員）

研究者番号：４０６３４５４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究「視聴覚メディアによるパフォーマンスの表象研究」は、ライブ・パフォーマンスが視聴覚メディアによって歴史的にどのように表象されてきたのかを、戦前の日本の映像メディア（映画）と音響メディア（ラジオ）を例として考察したものである。これらの歴史的事例を一次資料から分析することにより、パフォーマンスのライブ中継を映画館で行うといった今日の実践を、映画史と放送史の双方から歴史化する枠組みを提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は、（１）これまで視覚メディアと聴覚メディアで分離していたメディア史の記述に対して、パフォーマンスの表象とライブ性という概念を持ち込むことにより、両者を横断的に捉える歴史的枠組みを提示したこと、（２）映画史、放送史の双方で見過ごされてきた映画館における中継の実践、放送における映像文化の利用といった事例に焦点をあてたこと、以上の二点である。

研究成果の概要（英文）：This research project, “A study of the representation of performance by audio-visual media,” aims to trace the history of representation of live performance through media by analyzing the performance in cinema and radio in pre-war Japan. This historical analysis provides a framework for contextualizing the current practice of live broadcast in movie theaters in both cinema history and the history of broadcasting.

研究分野：映画・メディア研究

キーワード：メディア史　映画館　ラジオ・ドラマ　パフォーマンス　ライブ性　ライブ・ビューイング

１．研究開始当初の背景

昨今のメディア史の研究では、個別のメディアの歴史（例えば写真史、映画史、ラジオ史）をみていくのと並行して、視覚文化、サウンドスケープといったテーマから、メディア横断的にアプローチする研究がみられるようになった。しかし、こうしたメディア横断的な研究は視覚メディア、聴覚メディアで分離していることが多く、両者が並行して論じられることが少ない。特に演劇などのパフォーマンスのメディア表象という点では、身体や声の表象を総合的に捉える必要があり、映像メディアと音響メディアの歴史を共時的にみていく歴史記述の枠組みが必要である。

また、映画史、放送史といった個別のメディア史の歴史においては、映画館における中継の実践、放送における映像文化の利用といった、異なるメディアが交錯する事例については取り上げられることが少なかった。しかし、今日の演劇やスポーツの中継映像を映画館で上映するライブ･ビューイングといった実践は､個々のメディア史の記述では捉えきれないものであり、こうした事例をメディア史の文脈の中に位置付けその意義を問うためにも、映画史と放送史の交錯点に着目した研究が必要となる。

２．研究の目的

本研究では、映像メディア史と音響メディア史を複合的に捉える方法として、パフォーマンスの表象とライブ性という概念に着目して研究を行なった。具体的には、今日の映画館におけるライブ・ビューイングの実践を歴史化することを目標に、そこに至るメディア史の系譜を映画史と放送史の双方から探った。そこでは、（１）戦前の日本における映画興行において、映画上映以外の実践にはどのようなものがあったのか、映画の作品分析にとどまらない映画興行の全貌を明らかにすること、（２）戦前のラジオ放送において、ライブ性または中継の概念は他のメディアとの関係からどのように構築されていたのか、ラジオ・ドラマを事例に明らかにすること、（３）今日の日本でみられるライブ・ビューイングの事例を映画史と放送史の接点として位置付け、その概観を提示すること、以上の三点を目的とした。

３．研究の方法

前述した（１）（２）の戦前の事例については、新聞、業界紙、映画館パンフレット、ラジオ・ドラマの脚本といった一次資料を、早稲田大学演劇博物館、国立国会図書館、NHK 放送博物館といったアーカイブで収集し、当時の実践の記録や批評から興行や放送の全貌を明らかにすることを行なった。また、（３）の今日のライブ・ビューイングの位置付けについては、メディア・スタディーズの分野における先行研究のみならず、パフォーマンス・スタディーズで提唱されているライブ性の概念に関する研究も踏まえ、パフォーマンスのメディア表象を考える上での理論的な枠組みについても刷新するように努めた。

４．研究成果

本研究の成果は、下記の通りである。

（１）戦前の日本における映画興行については、関東大震災以降の東京における映画館の近代化をテーマに、その全貌を明らかにした。その結果、日本の昭和のモダニズム文化と呼応して、映画興行においてもその建築やプログラミング、トーキー映画といった新たなテクノロジーの導入といった形で近代化がみられ、レビューなどのライブ・パフォーマンスやラジオやレコードなどの音響メディアとのタイアップが数多くみられることが分かった。成果としては、2017 年 11 月に神戸映画資料館で開催された早稲田大学演劇映像学連携研究拠点主催シンポジウム「映画館研究の現状と将来」、また 2018 年 11 月に韓国映像資料館で開催された国際シンポジウム「「イデオロギーと興行のあいだ―植民地／帝国の映画館、映画文化」 で口頭発表を行なった。さらに成果をまとめた英語論文は、日本映画に関するアンソロジー、*A Companion to Japanese Cinema* （Wiley-Blackwell）に掲載されることが確定している。

（２）戦前のラジオ放送におけるライブ性の概念の構築については、1930 年代初頭の弁士が出演する映画のラジオ・ドラマ化番組を題材として研究を行ない、表象文化論学会第13回大会で口頭発表を行なった。発表では、当時のラジオ・ドラマのライブ性が、新聞におけるラジオ欄などの文字媒体や、スポーツの実況中継における観客性と相関しながら形成されていたことを明らかにした。戦前の日本における映画のラジオ・ドラマ化の様相については、早稲田大学 20 世紀メディア研究所の研究会で発表し、同研究所が発行する雑誌 『イ

ンテリジェンス』19 号に論文を投稿した。また、この成果の英語論文については、戦前の日本のサウンド文化に関するアンソロジー、*The Culture of the Sound Image in Prewar Japan*（Amsterdam University Press）に掲載されることが確定している。

（３）今日のライブ・ビューイングの位置付けに関しては、まずライブ性をめぐる歴史的・理論的枠組みを提案する目的として、社会情報学会 2016 年度大会において口頭発表を行い、メディア研究、情報学、文化人類学といった他分野の研究者との共著論文を、『東京大学大学院情報学環情報学研究　調査研究編』33 号に投稿した。また、日本におけるライブ・ビューイングの実践を、映画のデジタル化（映画史）、ラジオ／テレビに系譜を持つ中継（放送史）、今日の日本のメディア環境を形容する「メディア・ミックス」（日本文化史）の交錯点として位置付けた発表を、国際学会 Society for Cinema and Media Studies の年次大会　（2019 年 3 月）で行い、英語圏における同様の実践（Alternative Cinema, Event Cinema）との比較検証を行なった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

仁井田千絵「日本映画のサウンド移行期におけるラジオとの関わり―映画人のラジオ出演をめぐって」『Intelligence = インテリジェンス』19 号、2019 年 3 月、148-155 頁（査読あり）

野澤俊介、難波阿丹、難波純也、仁井田千絵、近藤和都「情動の出来事性―インターフェイス・ライブ性・交感―」『東京大学大学院情報学環　情報学研究　調査研究編』33 号、2017 年 3 月、1-30 頁（査読なし）

〔学会発表〕（計６件）

Chie Niita, “Screening ‘Other Digital Stuff’: Live Broadcast of Theatre in Cinema Exhibition in Japan,” Annual Conference of the Society for Cinema and Media Studies, Seattle, 13 March 2019

仁井田千絵,「関東大震災後の日本の映画館の近代化」国際シンポジウム「イデオロギーと興行のあいだ―植民地／帝国の映画館、映画文化」、韓国映像資料院、2018 年 11 月 3 日

仁井田千絵「メディアの音響空間をめぐるローカル／ナショナルの様相―戦前の映画とラジオの関係から」20 世紀メディア研究所第 121 回研究会、早稲田大学、2018 年 9 月 22 日

仁井田千絵「ラジオ研究の可能性―ライブ性と物語世界の構築をめぐって」表象文化論学会第 13 回大会、神戸大学、2018 年 7 月 8 日

仁井田千絵「東京の映画館に見られる近代性―関東大震災から日劇開場まで」早稲田大学演劇映像学連携研究拠点 平成 29 年度公募研究「演劇博物館所蔵の映画館資料に関する複合的カタロギング」主催シンポジウム、神戸映画資料館、2017 年 11 月 12 日

野澤俊介、難波阿丹、難波純也、仁井田千絵、近藤和都「メディア研究の方法論――パフォーマンス、労働、リメディエイション」社会情報学会 2016 年度大会、札幌学院大学、2016 年 9 月 11 日

〔図書〕（計１件）

仁井田千絵「映画」「アメリカ」丸本隆、荻野静男、佐藤英、佐和田敬司、添田里子、長谷川悦朗、東晴美、森佳子編『キーワードで読む　オペラ／音楽劇　研究ハンドブック』アルテスパブリッシング、2017 年 4 月、210-214 頁、338-340 頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：

種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。